

Spirituality 評定尺度(SRS-AB)を使用した主な論文: 調査対象者の平均年齢降順

対象者	論文名	著者	雑誌名	要旨
<p>在宅で暮らす高齢者 87名(男性33名, 女性54名) 80.3±8.0歳</p>	<p>在宅で暮らす高齢者のスピリチュアリティに関する研究 :QOL向上に向けたスピリチュアルケアとは</p>	<p>横尾 誠一 辻 麻由美</p>	<p>ホスピスケアと在宅ケア 26巻3号 Page342-350 (2018.12)</p>	<p>本研究は、在宅で暮らす高齢者を対象として、Spirituality Rating Scale(SRS-A SRS-B)、WHO/QOL26を使用して調査を実施し、スピリチュアリティとQOLの関連を検討することにより、在宅で暮らす高齢者のQOLの向上に向けたスピリチュアルケアの要因を明らかにすることを目的とした。分析対象者は、A県内の通所リハビリテーション施設(2施設)を利用している高齢者87名(男性33名、女性54名)、平均年齢は、80.3±8.0歳。分析方法は、QOLへの影響要因は重回帰分析(強制投入法)にて分析した。次いで、スピリチュアリティ(SRS-A)への影響要因を重回帰分析(強制投入法)にて行った。結果、「家庭での役割」の項目のみが在宅で暮らす高齢者のQOLおよびスピリチュアリティに影響する要因であった。在宅で暮らす高齢者自身が家庭での自らの存在意義が高められるようなケアを行う必要性が示唆された。</p>
<p>老人クラブに所属している高齢者 57名(男性27名, 女性30名)</p> <p>精神科病院入院中の高齢者 49名(男性29名, 女性20名)</p> <p>計106名 74.0±6.9歳</p>	<p>高齢者のスピリチュアリティの影響要因の検討 :在宅高齢者と精神科入院高齢者との比較</p>	<p>横尾 誠一 大町 いづみ</p>	<p>ホスピスケアと在宅ケア 19巻3号 Page330-337 (2011.12)</p>	<p>本研究は、在宅高齢者、精神科入院高齢者を対象として、Spirituality Rating Scale(SRS-A, SRS-B)を使用して調査を実施し、高齢者のスピリチュアリティの影響要因を明らかにすることを目的とした。対象者は、A県内の老人クラブに所属している高齢者57名(男性27名、女性30名)、A県内の精神科病院に入院している高齢者49名(男性29名、女性20名)の計106名、平均年齢は、74.0±6.9歳。研究方法としては、t検定、数量化I類を行った。t検定の結果、SAS-A合計点、SRS-Aの構成因子である「意欲」「深心」「意味感」「自覚」「価値観」の各因子の合計点において、在宅高齢者と精神科入院高齢者では、全ての項目にp<0.000の有意性が確認された。数量化I類のアイテムレンジ及び偏相関係数の結果から、「病というものは」が在宅高齢者、精神科入院高齢者のスピリチュアリティに大きな影響を与えることが確認された。</p>
<p>脳卒中後遺症をもつ在宅療養者 20名(男性15名, 女性5名) 71.6±7.8歳</p> <p>その主介護者 20名(男性3名, 女性17名) 62.9±10.3歳</p>	<p>在宅療養者と介護者の神気性(スピリチュアリティ)に関する要因分析</p>	<p>比嘉 勇人 比嘉 肖江</p>	<p>人間看護学研究 2号 Page13-19 (2005.03)</p>	<p>在宅療養者と介護者のスピリチュアリティ(神気性)を明らかにすることを目的に、脳卒中後遺症をもつ在宅療養者20名とその主介護者20名の計40名(うち、女性22名)を対象に、国内で唯一のスピリチュアリティ測定尺度であるSpirituality 評定尺度(以下、SRS)を用いたアンケート調査を行うとともに、半構成的面接を実施した。SRS得点を結果変数に、また、半構造化面接で聴取した「対象者」「性別」「年齢」「一番の支え」「周囲への感じ」「自分の今後」を原因変数とし、一つの結果変数を複数の原因変数で説明(予測)する際に用いられる多次元的解析法の一つである数量化I類により分析した。その結果、スピリチュアリティを高くする要因として、「一番の支え(支えとなる人がいること)」「周囲への感じ(周囲に対して肯定的であること)」「自分の今後(自分のこれからに希望を持っていること)」の3つが明らかになった。</p>

<p>温熱療法を受けている患者 10名(男性1名, 女性9名) 62.3±8.2歳</p>	<p>がんの免疫温熱化学療法(ハイパーサーミア)を受けている患者の心理状態と主観的健康感との関連</p> <p>久木原 博子 聖マリア学院大学紀要 安藤 満代 2巻 Page19-24 林田 繁 (2011.07)</p>	<p>がんの免疫温熱化学療法を受けている患者の心理状態と体状態(主観的健康感)との関連について検討した。施設において免疫化学療法を受けている患者10名を対象に、臨床心理士が個別に1回1時間程度の面接調査を行った。治療を受けている患者10名(男性1名、女性9名、平均年齢62.3歳)に対して面接を行い、がんの病期はⅢ期またはⅣ期であり、認知障害がなく、面接に耐えうる心身の状態と医師が判断した。心理状態の評価をSpirituality評定尺度と抑うつ感尺度で評価し、身体状態を主観的な健康感として点数化して評価した。Spiritualityと主観的健康感との間には正の相関があり、抑うつ感と主観的健康感の間には負の相関があった。がんの免疫温熱化学療法を受けている患者の心理状態と身体状態は関連していた。免疫温熱化学療法を受けている患者に対して心理介入をする必要性が示唆された。</p>
<p>精神科病院の入院患者 153名(男性99名, 女性54名) 58.9±11.9歳</p>	<p>精神障害者のスピリチュアリティへの影響要因の検討</p> <p>横尾 誠一 日本精神保健看護学会誌 大町 いづみ 19巻1号 Page84-93 井上 高博 (2010.06)</p>	<p>本研究は、精神科障害者に対して、Spirituality Rating Scale(SRS-A、SRS-B)を使用して調査を行い、精神障害者のスピリチュアリティの影響要因を明らかにすることを目的とした。対象者は、X県内の精神科病院(3病院)に入院している患者153名(男性99名、女性54名)、平均年齢は、58.89±11.85歳。研究方法としては、一元配置分散分析、Tukeyの多重比較、数量化I類を行った。結果、「友人の有無」「役割の有無」「活動の参加の有無」「関心、好奇心の有無」にSRS-A得点の平均値の有意差が見られた。数量化I類のアイテムレンジおよび偏相関係数の結果から、「一番の支え」「関心、好奇心の有無」「自分のこれから」「病とは」「一番したいこと」が精神障害者のスピリチュアリティに大きな影響を与えることが確認された。</p>
<p>透析外来患者 22名(男性10名, 女性12名) 59.8±8.8歳</p> <p>看護師 13名(男性2名, 女性11名) 42.6±6.6歳</p>	<p>透析外来患者と看護師の神気性(スピリチュアリティ)に関する要因</p> <p>比嘉 勇人 臨床看護 比嘉 肖江 28巻12号 1770-1776 (2002.11)</p>	<p>透析外来22名(男10名,女12名,平均59.8歳)と看護師13名(男2名,女11名,平均42.6歳)を対象に、Spirituality Rating Scale(SRS)と神気性に関する内容の半構造化面接を行った。分析は数量化I類を用い、結果変数にはSRS得点を、原因変数には面接時に聴取した「看護師-患者」「年齢」「性別」「一番したいこと」「病とは」を用いた分析の結果、カテゴリ・ウエイトのレンジは順に3.68,1.46,6.70,8.53で、重相関係数、決定係数は0.54,0.29であった。SRS得点に対して「性別」は殆ど影響度がなく、「一番したいこと」「病とは」は影響要因であることが示唆された。</p>
<p>インターネット調査会社に登録されている20歳以上の男女 200名(男性100名, 女性100名) 49.2±11.9歳</p>	<p>Functional Assessment of Chronic Illness Therapy-Spiritual Well-Being-Non-Illness(Facit-Sp-Non-Illness)日本語版の信頼性・妥当性の検証</p> <p>入江 亘 東北文化学園大学 塩飽 仁 看護学科紀要 鈴木 祐子 5巻1号 Page1-8 井上 由紀子 (2016.03) 相墨 生恵</p>	<p>本研究の目的は、患者用に開発されたFacit-Spを基に作成されたFacit-Sp-Non-Illness日本語版の信頼性と妥当性を検証し、患者以外のSpiritualityの評価を可能にすることである。我々はFacit-Sp-Non-Illness日本語版を順翻訳、逆翻訳によって作成した。調査は2015年にインターネット調査会社を通して実施し、200名から回答を得た。最尤法、Promax回転を用いた12項目の探索的因子分析により原版と同様2因子構造が得られた。Cronbachのα係数は各因子、全体で.87～.92であった。Facit-Sp-Non-Illnessの併存的妥当性はSpirituality評定尺度から、弁別的妥当性は、宗教への信仰によりそれぞれ確認した。Facit-Sp-Non-Illness日本語版は信頼性と妥当性を確保できると考えられた。</p>

総合病院に勤務する看護師
864名(男性67名, 女性797名)
35.0±11.1歳

看護師のストレスと私的スピリチュアリティとの関連

津谷 麻里
比嘉 勇人
田中 いずみ
山田 恵子
富山大学看護学会誌
14巻1号 Page41-48
(2014.06)

【目的】看護師のストレスと私的スピリチュアリティとの関連性について検討し、ストレス緩衝モデル開発の基礎とする。
【方法】総合病院に勤務する看護師1046名を対象に無記名自記式の質問紙調査を実施した。質問紙は、属性、職場ストレススケール改訂版(Job Stress Scale Revised version: JSS-R, 69項目)、**スピリチュアリティ評定尺度(私的スピリチュアリティ:15項目)**で構成した。JSS-Rは、「質的負荷ストレス」「量的負荷ストレス」「問題解決コーピング」「問題放置コーピング」「相談コーピング」「心理的ストレス反応」で構成される。「私的スピリチュアリティ」は、「意気」「観念」の下位尺度から成る。以上の各変数で構成された共分散構造モデルを求めた。
【結果と考察】有効回答者は864名(女性797名, 男性67名)であり、年齢(mean±SD)は35.02±11.12歳であった。適合度は概ね良好で(AGFI=0.928, CFI=0.952, RMSEA=0.077)、全ての係数は $p < 0.05$ であった。「私的スピリチュアリティ」と「質的負荷ストレス」においては互いに負の影響(因果係数-0.29, -0.20)を及ぼすことが確認され、ストレスサーに關与する意味づけ回路が推定された。また、「私的スピリチュアリティ」は「問題解決コーピング」に正の影響(因果係数0.46)を及ぼすことが確認され、個人の「意気」による問題の焦点化と問題解決コーピングの発動性の關与が考えられた。「私的スピリチュアリティ」においては「心理的ストレス反応」に負の影響(因果係数-0.30)を及ぼすことが確認され、個人のポジティブな「観念」がネガティブな「心理的ストレス反応」を抑制していることが考えられた。
【結論】「質的負荷ストレス」が「私的スピリチュアリティ」への關与を通して「心理的ストレス反応」に抑制的な影響を及ぼすことを説明する「私的スピリチュアリティ・ストレス緩衝モデル」が示された。

4年制大学の看護学生
79名(男性8名, 女性71名)
21.3±0.6歳

看護学生としてのアイデンティティと私的スピリチュアリティの関連および看護学生アイデンティティ確立に向けた方策の検討

浜多 美奈子
比嘉 勇人
田中 いずみ
山田 恵子
富山大学看護学会誌
16巻2号 Page107-124
(2017.03)

【目的】看護学生のアイデンティティとスピリチュアリティの因果モデルを作成し、看護学生としてのアイデンティティ確立に向けた方策を検討する。
【方法】看護学生79名に、看護学生アイデンティティ尺度(SEINS)と**スピリチュアリティ評定尺度(SRS-A, SRS-B)**を用いて共分散構造モデルを求めた。また、SEINS判定基準に従ってSRS-Bの回答内容を分析した。
【結果】共分散構造分析の結果、SRS-BからSRS-Aへのパス係数は0.71、SRS-AからSEINSへのパス係数は0.89であった。特定されたモデルの適合度は概ね良好であった。また、SRS-Bへの回答内容(ポジティブ回答内容Pと非ポジティブ回答内容Nの出現比率)を分析した結果、アイデンティティ拡散傾向群はP:N=0.15、モラトリアム群はP:N=0.79、アイデンティティ確立傾向群はP:N=1.82であった。
【結論】看護学生としてのアイデンティティに私的スピリチュアリティが影響を与えることを示す看護学生アイデンティティ因果モデルが作成され、私的スピリチュアルな側面から看護学生アイデンティティ確立に向けた方策への示唆を得た。

東北芸術工科大学の学生
1263名

Spirituality評定尺度項目に関する項目
反応理論による分析

渡部 諭
久保田 力
杉山 朗子

東北芸術工科大学紀要
24巻,1-12,
(2017-04-01)

We analyzed 15 spirituality items by factor analysis. From Higa's 5 factors we combined to create 3 factors in our analysis. The first factor we shall call 'self-consciousness and values', the second factor 'volition and meaningfulness' and the third factor 'human spirit'. Each of these designations became group titles for item groups. After building a 2 parameter logistic model, we examined item parameters, the ability parameter and item information of the model. We found, however, there were no items that reflected any difference among examinees of high ability in the first and third groups. But we also found that among the groups, especially the second, there were mostly only easy items and few difficult items. Additionally, in the first group it was found that about half of the examinees showed strong 'self-consciousness and values' and the other half were found to have weak one. But in the second group almost every examinee showed strong 'volition and meaningfulness', while the third group had more than two-thirds of its members showing a strong 'human spirit'. We conclude that more survey items are necessary in order to measure and understand examinees of high ability and their degree of belongingness to some "transcendent entity".